

## 教材活用シリーズ 第100回

☆日図協加盟出版社の発行している教材について、実際の授業における活用例、より効果を得られるポイント（場面・方法）などをご紹介します。

自分でできる 自分でわかる 国語ワーク

(株)秀学社  
『新しい 国語のワーク』



(株)秀学社  
編集部国語担当

平成28年に全面改訂を行った弊社の国語ワークのキーコンセプトは、「生徒一人で問題に取り組めて答え合わせもできる、家庭学習をする生徒にとってわかりやすいワーク」である。平成29年に発刊した三省堂版では、その「生徒目線」をさらに追求し、内容を深めたものとなっている。

### 1. とらえやすい全体像（画像A）

漢字・語句などの確認の後に、教材の構成をまとめた「流れをつかもう」「構成をとらえよう」というページを設けている。教材が物語や

小説なら「流れ」を、説明文や評論文なら「構成」を、視覚的にとらえようというものである。一目でとらえやすいようにまとまり毎に色分けしており、空欄に教科書の言葉を埋めることで全体像がつかめるようになっていく。国語が苦手な生徒にも答えやすいので、多くの先生に支持をいただいている。

### 2. 「記述力」を高める（画像B）

主要教材の最後には記述式の問題「チャレンジ」を設けている。物語・小説では人物の心情変化や作者の思いを、説明文・評論文では文章

（画像A）

▼流れをつかもう  
（物語や小説）



▲構成をとらえよう  
（説明文や評論）

の要旨や筆者の主張などを、50字〜70字程度で、使用語句を指定するなど条件をつけて書くものである。

書くことが苦手な生徒のサポートとして、目のつけどころや「書き出し例」をヒントとして示している。また、三省堂版ではヒントを深化させ、「何を」「どう書くか」をステップ形式で示し、最後にヒント同様に書き出し例を示している。「どう書けばよいかわからず書く手が止まる」という生徒でも、手を動かしやすくなっている。

### 3. 記述問題の「採点基準」

国語のワークは自学自習で使われることが

